

# 丹波新地域ビジョン

## －概案検討ノート－

令和3年9月

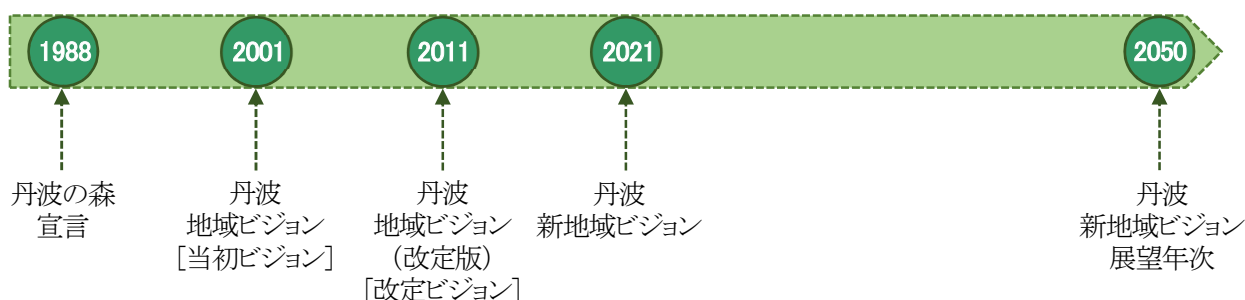
兵庫県丹波県民局

# 目 次

I はじめに	1
II わたしたちの丹波ー風土・文化、ポテンシャル	2
III 丹波の森づくりのこれまでとこれからー継承と発展	4
1. 丹波の森づくりの理念、成果	4
2. 現行ビジョンの成果検証	7
3. これからの森づくりに向けて	7
IV 新ビジョンの基本理念、基本的視点	11
1. 基本理念	11
2. 基本的視点	12
V 2050年の丹波を描くー望ましい地域の姿	
1. 2050年に向けた長期変化	
2. 2050年の地域社会ー空間像、社会経済像、人間像	
VI 将来像実現に向けたシナリオ	
VII 推進の体制・枠組	
<資料編>	
ビジョンを語る会等の開催実績及び意見の分析	
ビジョン評価指標データ	
アンケート調査 調査票、調査結果	
2050年の将来像各論	
委員会メンバー・開催状況等	

## 1 はじめに—新ビジョンの役割・性格—

- 「丹波新地域ビジョン」（以下新地域ビジョン）は、「丹波地域ビジョン」※が 2020 年に終了するのに伴い、その後継ビジョンとして策定されるものです  
 ※この冊子では、2001 年策定の「丹波地域ビジョン」を「当初ビジョン」、2011 年改定の「丹波地域ビジョン改定版」を「改定ビジョン」と記しています。両者を指す場合は「地域ビジョン」と記載します
- 新ビジョンは、2050 年を展望して望ましい地域の将来像、ビジョンを描くとともに、ビジョンの実現に向けた道筋、シナリオを示しています
- 新ビジョンは、丹波地域の住民、地域団体、事業者、行政をはじめ、地域のすべての個人・団体の間で共有されるものです。その実現に向けた取り組みも、参画と協働の理念のもと、すべての主体とともに進めていきます。
- 丹波地域に親しみや愛着をもつ地域外の人々（交流人口・関係人口）にも、新ビジョンの実現に向け、活動の担い手になるよう呼びかけていきます
- 新ビジョンは、これまでの丹波の地域づくり（丹波の森づくり※）や「丹波地域ビジョン」の取り組みを発展的に継承していきます  
 ※丹波の自然と文化の維持・発展に向けた取組を「丹波の森づくり」と呼んでいます。「丹波の森宣言」（昭和 63 年 9 月 1 日）にはじまるその歴史は、30 年以上に及びます（III-1 参照）
- 今日、多くの方が地域の変化の必要性を認識しています。アンケート<sup>Q11</sup>新ビジョンでは、「丹波地域ビジョン」の「成長しつづけるビジョン」の考え方を受け継ぎ、『挑戦・成長』をキーワードに、時代の変化に柔軟に対応し、新たな取組を生み出し続けていくビジョンとします
- 新ビジョンは、『未来志向』のビジョンです  
 —挑戦的な目標（ムーンショット）を設定し、そこから遡って（バック・キャストイングして）、近未来（ポストコロナ社会）、現在になすべきことを考えていきます  
 —地域資源、人材、絆など地域の強みを活かし、将来の可能性を積極的に追求していきます



## Ⅱ わたしたちの丹波－風土・文化、ポテンシャル

- わたしたちの丹波は、緑豊かな山々に囲まれ、古より「森」の恵みを受けつつ、「農」を土台に発展してきた多自然地域です。ここでは、今も日本の伝統的な暮らしや原風景に出会うことができます。
- その一方で、独自の地勢・環境や歴史・伝統文化を背景として、多彩な固有の魅力を放っている地域でもあります。ここにしかない魅力にあふれ、誇りと愛着を持って暮らしていける地。それが丹波なのです。

### [共生]

- －丹波は約75%が森林で覆われている「森の国」です。どこにいても身近に里山があり、自然とのふれあいを楽しむことができます
- －加古川、由良川、武庫川の源流域に位置し、「源流の里」とも呼ばれる丹波には、ホトケドジョウ、バイカモ、クリンソウなどの貴重種が生息する豊かな自然環境が今もなお残されています。
- －低地地帯「氷上回廊」(p.3参照)の存在により、丹波は生物多様性に富んだ地域になっています。南方系(瀬戸内海側)と北方系(日本海側)の魚が同じ河川に共存し、南国と雪国の植物が混在して生息しています。

### [豊穰]

- －盆地特有の気候のもと、深い栄養を蓄えた粘土質の土壌、澄んだ空気と清らかな水に恵まれた丹波は、古来より豊穰の地として知られてきました。丹波霧が象徴する昼夜の寒暖の差は作物の生育に絶好の条件を生み出しています
- －この豊饒の地であることによって、丹波三宝として全国的に名高い丹波栗、丹波大納言小豆、丹波黒大豆をはじめ、粘りと甘みのある米、山の芋、猪肉・鹿肉、有機野菜など、丹波は今日多彩な産物を誇っています。2021年には「丹波篠山の黒大豆栽培」が日本農業遺産に認定され、300年前から続く持続的な農業が高く評価されることになりました
- －地域の人がふるさと丹波で思い浮かべるものとして、こうした産物の味覚をあげています。<sup>アソケQ6</sup>それは、人々の心の中でふるさとの重要な構成要素となっています。

### [伝統]

- －豊かな民俗文化が今も残るのが丹波です。秋祭に笛を響かせ太鼓を鳴らす田楽踊りは、室町時代に都から伝えられたものです。一方、この地で興った丹波猿楽が当時都で流行した能楽(猿楽)のルーツとなりました
- －江戸時代の民謡を起源とするデカンショ節は、時代ごとの風土や人情などを読み込んで歌い継がれ、郷土への愛情を育んできました。2015年には日本遺産に認定され、地域固有の文化としてデカンショ節の魅力が改めて発信されつつあります
- －平安時代末期が起源といわれる丹波焼は、日本六古窯の一つとして、2017年日本遺産に認定され、産地は再び活気づいています。江戸時代からその技が受け継がれて

- きた丹波織、丹波木綿も、近年その価値が見直されつつあります
- －城下町（丹波篠山市市街地、丹波市柏原町）や宿場町（福住地区）では、歴史的建造物が保全され、伝統的なまちの佇まいが今も残されています。山裾や川沿いに点在する農村集落には茅葺き民家や白壁の土蔵が残り、日本の原風景を今に伝えています

## [交流]

- －かつて丹波は山陰道や京街道などの街道筋として栄え、都や諸国との間で文物の交流が盛んでした。古代には、山陰道を通して都の使いが地方に赴き、丹波からは野の幸、山の幸が都へ届けられていました。加古川、竹田川の舟運によっても、瀬戸内海、日本海の両側から多く人、ものが運ばれてきました
- －交流は、現代の丹波を特色づけているキーワードでもあります。高度成長期以降半世紀以上にわたり、阪神地域と丹波地域の間で地域間交流が続いています。野外教育施設「丹波少年自然の家」では、自然学校にやってきた阪神間の子どもたちが地元の人々と交流し、大学のサテライト拠点では多くの大学生が地域貢献活動に取り組んでいます。

## [地勢・地質]

- －盆地内にのどかに広がる田園地帯と、それを抱くように連なる比高※ 600m 余の山々によって、丹波では四季折々の変化に富んだ景観が創りだされています
- ※山頂と盆地の底といったような、ある地域内における二地点間の高さの差
- －本州一標高の低い中央分水界（水別れ）を中心として、瀬戸内海側と日本海側の風が出会い、生き物が行き交う低地帯「氷上回廊」が形成されています。この回廊があることで、特色ある気候・風土が生み出されてきました
  - －1億年以上前の前期白亜紀の地層である篠山層群では、丹波竜などの恐竜類や世界最小の恐竜の卵など、世界的にも貴重な化石の発見が相次いでいます。篠山層群の上には田園地帯が広がり、「農村風景と恐竜が共存する」世界的にも希な地域となっています

## [気質]

- －丹波にはあったかい人、温厚な気質の人が多いといわれています（丹波という言葉には“ほっこりとした”イメージがあると指摘する人もいます）。そうした気質が移住者など外部の者を受け入れる、「寛容性」に富んだ風土を生んでいるとの声もあります
- －丹波の人々の寛容な心は、緑豊かな山々、美しい田園が広がる風土のなかで、自然と共生する暮らしを営んできたことで、知らず知らずのうちに育まれてきたともいわれています。
- －今もなお、集落単位や地区単位（明治時代の旧村などが前身）の絆が強く、自治意識が高いのが、丹波の人々です。それぞれの集落が自立し共存しようとしている、いわば「集落共和国」として存立しているのが、丹波なのです。

### Ⅲ 丹波の森づくりのこれまでとこれから—継承と発展—

#### 1 丹波の森づくりの理念、成果

- 「丹波の森宣言」(昭和 63 年 9 月 1 日) 当時、自然との共生を謳い、先導的であった丹波の森づくりの理念は、今や普遍的なものになりつつあります。その理念は、SDGs (持続可能な開発目標: Sustainable Development Goals) の考え方とも軌を一にし、世界で広く共有されるべきものであります
- また、ふるさとづくりを進めるその考え方は、現在の地域創生の考え方を先取りしたものと いえます

##### 1-1 「丹波の森」、「もりびと」とは

- 丹波の森は幅広い概念です。『私たちを取り巻くすべての環境』が「丹波の森」として理解されています

『森』 = 森林、田園、集落、まちを含む空間全域  
= 人、生き物全ての営み (丹波の風土・文化、生業)  
= 人々の結びつき、ネットワーク

- 丹波の森づくりとは、『人と自然と文化の調和した地域づくり』であり、『みんなの共通のふるさとを創っていこう』とする試みです。地域住民だけでなく、丹波を愛するすべての人のためのふるさとづくりです

『ふるさと丹波のかけがえのない美しい自然はもちろん、暮らしやなりわい、地域内外の人々との交流、生活空間、生活文化など、私たちを取り巻くすべての環境を「丹波の森」と考え、より良い地域づくりに取り組んできました』(丹波地域ビジョン・丹波の森構想)

『「丹波の森がどこにあるのか？」とよく聞かれます。「鎮守の森」のように思っているわけです。「これが丹波の森です」というのではなく、丹波全体が一つの森に囲まれた、一つのユートピア、丹波に住んでいる人にも暮らしやすいし、外から来ても楽しいところだというみんなの共通のふるさとを創っていこう、これが丹波の森構想だと思います。』(河合雅雄先生:丹波の森大学講義録『自然と人間』)

- 丹波の森づくりの担い手は「もりびと」と呼ばれています。それは森を愛し、森を守るひとたちの総称です
- 現行ビジョンではもりびとを「森の市民」と表現し、「地域内外を問わず、丹波地域に誇りと愛着を持ち、丹波の地域づくりに責任を持って行動する自律した人々」と規定しています
- 「もりびと」(森の市民) は、伝統を守りながらも未来社会を切り拓く活動的、能動的な人材として期待される人たちです。自然・風土・文化等の地域の資源を守るとともに、将来を見通したうえで、それらを活用し新しい地域づくりを進めていく人たちです。もりびとに期待される役割は以下のように多岐にわたります

- もりびと  
守人：自然景観・環境を保全する、地域の安全・安心を守る
- もりびと  
盛人：生業を興す、地域を活性化する 開かれた地域を創る
- もりびと  
銛人：先陣を切る、社会に風穴を開ける 新しい時代を切り拓く
- もりびと  
策人：参画・企画する、将来をデザインする、シナリオを描く

『「もりびと」の“もり”には、「森」、「守」、「盛」などの意味を込めており、丹波の森を守り盛んにすることをめざします』（『丹波の森構想評価・検証報告書 本編』 p.54）

## 1-2 丹波の森づくりの成果とレガシー

### (1) 丹波の森づくりの推進状況

- 「丹波の森宣言」で謳った4つの宣言毎に、丹波の森づくりの取組の推進状況を以下に示しています

#### 宣言1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます

→ 森林の管理をはじめとして、丹波らしい土地利用が進むとともに、里山や水辺環境の再生に向けた取組が進展。農地・農業の保全に向け、仕組みづくり、担い手の育成が図られる。野生動植物との共生に向けた活動（希少動植物の保護）が活発化

#### 宣言2 丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます

→ 丹波らしい景観の保全・形成が進んでいます。自然を体感できる場・空間（丹波の森公苑、丹波並木道公園等）が生まれ、景観ネットワークが形成されています（ふるさと桜つつみ回廊、たんば三街道）

#### 宣言3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます

→ 歴史的景観・建造物や文化遺産（日本遺産等）の保全・活用が進められるとともに、自然遺産である恐竜化石を活かした地域づくりが進展。丹波ならではの特色ある芸術・文化の振興（県立陶芸館、シューベルティアードたんば）も図られています

#### 宣言4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます

→ もりびとが育ち、様々な分野で活躍。域内外の交流が活発になり、移住・環流、起業が拡大。丹波製品のブランド化も試みられています。ふるさと教育・食育の推進などにより、丹波の誇り（シビック・プライド）の醸成が図られています

### (1) 未来へとつなぐ森づくりのレガシーとは

#### [プラットフォームとしての制度的枠組み]

ー 県、市の条例施行や広域計画・指針の策定などを通じて、自然、景観、街並、歴史的建造物などの保全の枠組が整備されてきました。今後は、これらの枠組みを堅持するだけでなく、環境変化に応じて柔軟に見直していくことも必要となります

#### [人的資本の蓄積]

ー 丹波の森大学等の場を通じて、実践活動の中心となる担い手（もりびと）が輩出され

てきました。引き続き、この人材育成の仕組みを維持・発展させるとともに、地域内外での新たな担い手の発掘によって次代への活動の継承を図る必要があります

#### [つながり（ネットワーク、ソーシャル・キャピタル）の形成]

－森づくりの活動等を通じて地区・集落・個人単位で様々な外部とのつながりが育まれています。大学生による社会貢献活動も定着し地域と大学の連携も深化しています。こうしたつながりのさらなる拡大による森づくりの新たな担い手創出が期待されています

#### [拠点の形成と特色ある活動の展開]

－域内では、丹波の森公苑をはじめ各種施設が整備され、生涯学習、環境学習、芸術文化振興等の拠点が誕生してきました。そして、その施設・拠点の活用により、シューベルティアーデたんばなど特色ある活動が展開されています。今後、拠点の機能更新や活動を支えてきた仕組みの継承・発展が課題となります。

#### [市民精神の広がり]

－もりびとの活躍やまちづくり協議会・自治振興会等の活動を通じて、地域主導、県民主役の取組が拡大しています。また、その活動のなかから森づくりを担う新たな組織も生まれています。拡大する自助・共助の活動を内外の多くの人が支える仕組みの構築が今後重要になります

#### [ふるさと意識の醸成]

－地域に愛着を持つ人や地域資源に誇りをもつ人が増え、ふるさと意識が醸成されつつあります。ふるさと意識の高まりこそが、丹波の森づくりの最大の成果でありゴールであることから、次代に向け、ふるさと学習をはじめとするこれまでの取組の継続・拡大が求められています

#### [丹波の森づくりの新しい視点・取組方向]

『丹波の森づくり 30 周年記念誌』では、今後の基本方針として以下の 3 つの視点を提起しています

- ・「森のスローライフを楽しむ」  
－丹波ならではの暮らしのライフスタイル＝スローライフを楽しめる環境を整備していく
- ・「森の魅力をまるごと楽しむ」  
－森をまるごとフィールドミュージアムにする
- ・「帰りたいふるさとの森にする」  
－日本の原風景を守り、絶品の農産物を食し、郷土の工芸に触れ、帰りたい（行ってみたい、楽しみたい）ふるさとづくりを行なう

また、丹波の森づくりの新たな取組方向として、2 つの取組方向を提言しています

- ・「集落に暮らし続ける」  
－最先端技術の導入による新たな生活・移動サービスの実現  
－空き施設等を活用した、コミュニティの拠点としての「小さな拠点」整備
- ・「大交流時代（国際化）に対応する」  
－インバウンドの誘客に向けた環境整備  
－地域の固有文化の体験できるフィールドミュージアム整備



## 2 地域ビジョンの評価検証

- 改定ビジョン（2011年度策定：目標年次：2020年）では、5つの将来像（『自立』、『交流』、『元気』、『絆』、『安全・安心』）を掲げています（改定ビジョンでは、当初ビジョンの将来像の基本的方向を継承していますが、内容・表現については見直しを行なっています）
- 策定後、5つの将来像の達成状況を把握するため、将来像に関連する指標（客観指標74項目、主観指標54項目等）を設定し、毎年度フォローアップに努めてきました
- 新ビジョンの策定過程では、「ビジョンを語る会」、「丹波地域夢会議」等の開催や「丹波地域の今とこれからのアンケート」の実施などを通じて、将来像の実現状況について、丹波地域内外の方から多数ご意見を伺いました。こうして集めたデータや意見にもとづき、以下に5つの将来像の達成状況の検証結果をとりまとめています

### 将来像1：みんなで創る“自立のたんば”

- －地域の魅力発掘と情報発信、地域を担う人材の育成  
地域づくりへの住民参加の推進、地域で活動する団体の連携推進

#### [検証結果]

- ・地域に誇りや愛着を感じる人は増加傾向にあります
  - ・地域の宝となる地域資源があると思う人は一定数いるものの、大多数が地域資源の活用が十分進んでいないと認識しています
  - ・地域活動への参加率が県下で最も高く、地域課題の解決に向けて地域住民が主体的に活動する地域だと思う人が多数を占めています<sup>アンケートQ1</sup>
  - ・しかし、ボランティア登録者数などは減少傾向にあり、今後の地域づくりの担い手不足を懸念する声もあがっています
  - ・また、人口減少・高齢化とともに、自治会等の活動が縮小するなど、地域社会の活力低下が懸念されています。一方で、誰もが地域の一員として役割を發揮できる社会になっているとみる人は多くありません。<sup>アンケートQ4</sup>地域づくりの潜在的な担い手はまだいるとってよいかもしれません
- ⇒高い地域活動への参加率からみて、“自立”意識が高い地域といえますが、人口減少下で地域力の維持・向上をめざすには、移住者や関係人口をはじめ様々な人が参加する新たなネットワークの構築が今後重要になります

### 将来像2：都会に近い田舎を楽しむ“交流のたんば”

- －森・川・里の豊かな自然の保全と活用、環境に優しい地域づくりの推進、環境学習フィールドづくり、美しい景観づくりの推進、都市との多彩な交流の推進、丹波の田舎暮らし情報の発信

#### [検証結果]

- ・丹波の豊かな自然を守りたいという意識は徐々に広がりを見せています。この10年

で自然環境を守るための取り組みに参加している人も増えています

- ・丹波並木道公園などの県立公園や恐竜化石関連施設への来客数が増えるなど、交流人口は増加しつつあります
- ・丹波への移住相談件数は近年増加傾向にありましたが、コロナ禍の影響を受けた令和2年度以降、自然とふれあえるたんば暮らしへの関心は一層高まり、相談件数は急増。移住者数も拡大しています
- ・移住者と地域の方の交流は進んでいます<sup>アンケートQ2</sup>が、UJI ターンを含む移住者の受け入れ環境には改善の余地があるとの指摘があります。誇りを持って「帰ってきてほしい」といえる地域だと思える人はまだ少数にとどまっています<sup>アンケートQ8</sup>

⇒“交流”人口、移住者数とも増加傾向にあります。地域のポテンシャルを考えると、今後、環境を整備すれば、交流、移住はさらに拡大していく可能性があります

### **将来像3：やりがいを実感できる“元気なたんば”**

- －地域の産業をリードする農林業の振興、商店街の活性化・ものづくり産業の振興、丹波の魅力を活かしたツーリズムの推進、地域の資源を活かした「しごと」の創出、地域づくり活動・文化活動の推進、若者の就労促進

#### [検証結果]

- ・この10年間で作付面積は減少し、耕作放棄地は増加していますが、農林水産業産出額は増加しています。シェアは低いですが、農林業は元気な産業と認識されています<sup>アンケートQ6</sup>。農家戸数は10年間（2010－2020）で3/4にまで減少していますが、新規就農者は少しずつですが増えています
  - ・林業は経営体の集約化が進むなか、素材生産量は増加しています
  - ・製造品出荷額、商品販売額とも堅調に推移しています
  - ・観光面では、入込客数及び消費額ともに伸びをみせています。地域の人も訪問客の増加を実感し、宿泊業、飲食業が地域に活気をもたらしていると感じています<sup>アンケートQ6</sup>
  - ・「しごと」の面では、自分の仕事にやりがいを感じる人が全県と比較しても高い反面、就職・転職・起業しやすい環境が整っているとみる人は少数にとどまっています
  - ・住んでいるまちや地元企業に活気があると思う人は県下平均を下回っています
- ⇒地域経済は概ね堅調に推移していますが、新たな活力創出には、農林業、観光等の移出（外貨獲得）産業の拡大とその富（所得）の域内循環の促進が鍵になります
- ⇒時間や場所にとらわれない働き方が浸透するなか、各人のやりがいを満たす多様なしごとの創出が課題となります

### **将来像4：多世代が支え合う“絆のたんば”**

- －地域コミュニティの再生、地域ぐるみでの子育て推進、高齢者が安心して暮らせる地域づくり、高齢者が活躍できる地域づくり

#### [検証結果]

- ・住んでいる地域で「頼りになる知り合いが近所にいる」、「異なる世代の人との付き合い

いがある」と回答する人の割合が県下でも高く、地域内のつながり、信頼が強い地域であるといえます

- ・一方、そのつながりが地域での子育てのしやすさにつながっているかという点、必ずしもそうとはいえないのが現状です
- ・高齢者の暮らしやすさについても、都市部に比べあまり高く評価されていません。高齢者の知恵や経験が積極的に活用されていると感じる人の割合もあまり高くありません

⇒“絆”の強い地域であり、地域との関わりを今よりも深めたいと思っている人が多数にのぼります<sup>アンケート③</sup>

⇒この10年で生活の利便性が良くなったと思う人が増えているのですが<sup>アンケート⑤</sup>、さらに暮らしやすい地域にしておくためには、生活・子育て支援サービスの一層の充実が求められます。また、高齢者をはじめ各人が如何なく能力を発揮できるよう、様々なしごとや学びの場の創出に取り組んでいく必要があります

#### **将来像5：ともに暮らす“安全安心なたんば”**

－災害に強く、犯罪のない地域づくりの推進、誰もが暮らしやすいユニバーサル社会の実現、障害のある人も外国人も共に暮らす地域社会の実現、医療や健康、食の安全が確保された安心な地域の実現、

#### **[検証結果]**

- ・犯罪認知件数や交通事故の減少を受けて、「治安が良く安心して暮らせると思う人の割合」は増加傾向にあります
- ・防災面では、防災訓練や防災リーダー養成講座への参加者や住宅再建共済制度への加入者が増えるなど、防災意識が高まってきていることがうかがえます
- ・だれもが暮らしやすいユニバーサル社会の実現という点では、移住・交通の利便性への評価が低いこともあり、達成されたとみる人は少数にとどまっています。
- ・県立丹波医療センターの開設、医師（かかりつけ医）の増加などにより、健康・地域医療への安心感は高まっています。健康と感じる人も増えています

⇒総合的にみて、“安全・安心”な地域社会づくりは、進んでいるといえますが、暮らしやすい地域にしていくには、一人ひとりに寄り添ったきめ細かな支援や交通等の基盤整備が必要になります。

- 以上の検証結果から、地域ビジョンの将来像の実現に向け、この10年間一定程度進展があったことがうかがえます。
- しかし一方では、人材育成（「自立」）、まちの活力（「元気」）、子育て環境、高齢者の暮らしやすさ（「絆」）など、個々の課題も浮き彫りになりました。
- また、地域づくり（丹波の森づくり）が進展した反面、人口減少・高齢化のなかで、コミュニティ機能の低下が懸念されています
- 新ビジョンでは、地域ビジョンで成果を上げてきた取組を発展的に継承するとともに、課題の解決に向け、新たな取組の検討にあたります

### 3 これからの森づくりに向けて

- 丹波の森づくりは、制度の整備、担い手の形成、ネットワークの構築、拠点の形成、特色ある活動の展開、市民精神の広がり、ふるさと意識の醸成などの点で成果がみられました。この基盤・成果を活かしつつ、これからの地域づくりを進める必要があります
- 地域ビジョンのもとで、丹波の森づくりは里山づくりから景観形成、文化振興、賑わいづくり、人材育成まで、様々な分野に広がってきました。この活動の広がりが評価される一方で、活動の多様化に伴い森づくりのエネルギーが拡散してしまったと見る向きもあります。また、若い世代を中心に森づくり自体知らない人も増えてきています。  
アッケ Q10 今一度、原点である理念に立ち返り、運動としての森づくりの気運を高めていくことが必要となっています。
- 丹波の森づくりの理念（『人と自然と文化の調和した地域づくり』）やそれを踏まえた地域ビジョンの基本理念（『3つの環－自然、人、産業の環』※）は、今の時代においても尊重すべき考え方です。むしろ、人口制約、環境制約により持続可能な社会への転換がより差し迫った課題である今日のほうが、その理念に立ち返って物事を考える必要があるとあってよいでしょう。  
※『丹波のいのち（＝自然）、ひと（＝人間）、なりわい（＝産業）の3つの環をはぐくむ（「守り」「育て」「活かす」』（当初ビジョン）  
→『いのちをはぐくむ・自然の「環』は自然との共生、いのちの循環の促進、『ひとをはぐくむ・人間の「環』は人のつながりの拡大、『なりわいをはぐくむ・産業の「環』は産業間の連携拡大をめざすものです
- 一方、地域社会に目を向けると、地域（森）づくりが進展するなかでも、人口減少・高齢化に伴いコミュニティ機能の維持が年々難しくなりつつあります。このため、これまでの習慣や枠組みにとらわれず、時代に即した新しいコミュニティのあり方を模索していく必要があります。地域住民とともに、地域に愛着、関心のある様々な人にも、コミュニティの担い手として活躍してもらった新たな仕組みを整えていくことが重要になっています
- そこで、新ビジョンでは、

#### 『丹波の森づくり第2章：つなごう丹波の森づくり（世代をつなぐ、環をつなぐ）』

をキャッチフレーズにうたいます。「第2章」を宣言することで、新しい時代の到来を告げるとともに、時代の変化に対応した新たな取組を進める気概を示そうとしています。また、「つなごう丹波の森づくり」とうたうことで、丹波の森づくりや地域ビジョンの理念を尊重し次の世代に受け継ぐとともに、その理念がめざす持続可能な循環型社会の実現に向け（環をはぐくみ、つなぐ）取組を推進する姿勢を示そうとしています

## IV 新ビジョンの基本理念、基本的視点

### 1 基本理念

- 新地域ビジョンづくりの過程（「検討委員会・分科会」、「ビジョンを語る会」等）で得た地域の将来像に係る意見を集約・分析し、『森』、『人』、『農』が今後の丹波の将来を考えるうえで重要なキーワードであることを確認しました
- 『森』は丹波の地域空間全体を表す言葉、『人』は担い手（もりびと）やそのつながりを意味する言葉、『農』は丹波の暮らし、社会、産業を象徴する言葉と捉えています
- この3つのキーワードを用いて、以下のように、新ビジョンの基本理念を掲げ、その実現をめざします

#### 基本理念

「人」を創り、「森」を（守り）活かし、「農」をはじめとする生業を興すことで、安心して住み続けられる、自立した、活力あふれる‘ふるさと丹波’の創生をめざします

- この基本理念の実現に向け、新地域ビジョンでは、次の5つの方向性に沿って取組を進めます

#### [環境、経済、社会（くらし）の好循環]

- －環境の改善が経済、社会の発展、暮らしの向上をもたらす地域社会をめざします
- －新しい暮らしの創造によって、環境負荷の低減、経済の活性化を進めます

#### [農と食を中心とする産業、社会、暮らしの創造]

- －食を中心に産業の再編、融合を進め、食の拠点化をめざします。
- －農のある暮らしが楽しめる地域社会であり続けます。

#### [人と自然（生き物）の共生、人（感性）と技術の調和]

- －自然との共生を人の力とともに技術の力を活用して進めます
- －地域に見合った技術を選択し、暮らしやすい地域社会を実現します

#### [伝統の継承と未来への挑戦]

- －昔から残る丹波の森、風景や農の営みを未来に引き継ぐ一方で、時代に相応しい新しいくらしのかたちや生業の創造に挑みます

#### [参画・協働の深化－共感・共進化・共創へ－]

- －‘共感’を基本に担い手（もりびと）づくりを進めます。居住地、年齢、性別、国籍、障害の有無等に関係なく、森づくりに共感するだれもが担い手として活躍できる社会をめざします
- －学習・活動を通じて担い手がともに成長（‘共進化’）し、新しい価値の創造（‘共創’）に取り組みます

## 2 基本的視点

新地域ビジョンの推進にあたっては、丹波のポテンシャルやこれまでの丹波の森づくりの取組を踏まえ、以下の視点を重視します

### ○ 全ての人を温かく包み込む、開かれた地丹波－「寛容性」(開放性・包摂性)

- － 丹波の森づくりでは、交流のコンセプトを重視し、住民だけでなく、ビジターをも広く受け入れて取組を推進してきました。今後も、丹波の森構想の理念（「活力ある開かれた地域社会の実現」）に則り、定住人口だけでなく、想いを共有する「関係人口」（一時滞在者、二地域居住者、出身者等）にも開かれた地域づくりを実践していきます
- － 域内で外国人居住者が増加しているなかでは、多文化共生の視点に立った取組の推進も重要です。それが森づくりのグローバルな発信にも寄与することになります
- － 地域における多世代間の交流や多様性（ダイバーシティ）の確保といった観点も重視し、包摂型地域づくり（インクルージョン）を推進していく必要があります。結果的にそれが多彩な人材の有効活用につながり、森づくりの取組の成果を高めることにも貢献します

### ○ 資源、ものが循環し、社会、経済も回る最適化社会丹波－「循環性」

- － 森の豊かさを誇る丹波。この森の資源を循環利用することで、豊かな暮らしを実現させる取組が重要になります。木質バイオマス利用によるエネルギー自給率の向上や丹波の風土にあった新しい住まいの開発などが期待されています
- － 食の豊かさを誇る丹波。地産地消への意識も高まっています。<sup>アング Q7</sup> 地産地消のさらなる浸透を図り、食糧自給率の向上や域内消費の拡大を図るとともに、フードマイレージの低減化を進め、ゼロカーボン社会の実現をめざします
- － 様々なものを地域全体で共有し、循環利用する仕組み（シェアリング・エコノミー）を構築することも、環境負荷の低減、リーズナブルな暮らしの実現、持続可能な社会経済の構築をめざすうえで重要です

### ○ 多様な機会と選択肢に恵まれた、約束の地丹波－「可能性」

- － 大都市に近接するも、豊かな自然に恵まれた丹波。都市のサービスを享受しつつ、自然と共生する暮らし、スローライフを送ることのできる丹波では、ライフスタイル、ワークスタイルの選択の幅は広いといえます。実際、近年の移住者のなかでは、移住とともにやりたい暮らし、しごとをはじめ、個性的なライフスタイルを実現している人が増えてきています
- － 現在のデジタル革新の波と働き方改革の進展は、丹波でのくらしの幅をさらに広げる可能性があります。多様な選択肢に恵まれた地であることをアピールし、多彩な人材の集積を促すことは、丹波におけるイノベーション促進や起業拡大につながります。そして、それは活力に満ちたダイナミックな地域社会の実現に寄与することになります



○ ここでしか体験できない、味わえない丹波ならではの魅力ー「固有性」

- ー デカンショ踊り・丹波焼（日本遺産）、黒枝豆（日本農業遺産）、恐竜化石、水別れなど固有価値の高い地域資源を有する丹波。地元でも「住んでいる地域に自慢したい『宝』がある」と思う人が増えています（県民意識調査）
- ー この価値ある地域資源をさらに磨き直し、世界の中で丹波でしか体験できないオンリーワンの魅力を新たに創り出していく発想が重要です。それにより、域外の人々を丹波へと誘うことで活力の向上、ひいては移住・定住の拡大を実現することができます

○ 世界に伝播する丹波スタイルー「普遍性」

- ー 固有性を有する一方で、世界に通じる普遍的な要素をあわせ持つ丹波にすることで、その魅力はさらに高まります。
- ー 世界的に SDGs の達成とともに、AI（人工知能）、ロボット等が普及する超スマート社会（Society5.0）への対応が課題となるなか、デジタル技術の力を活かした、自然の中での新しい暮らしのかたち（持続可能な自律分散型居住モデル）は、世界が今探し求めているものであります
- ー 先端技術の地域実装を意欲的に進め、丹波の豊かな森を「未来社会の暮らしの実験場」とすることで、世界のモデルとなる丹波スタイルの創造・発信を図っていきます